

「息の根」考⁽¹⁾

松 山 康 國

『創世記』第二章に、エデンの園の中央には、生命の樹が立っていた、と記されている。エデンの園とは、一体、この世界のいづこの如何なる場所の名を指しているのであろうか。この園の名を、いま、世界の中のただ一つの或る特定の場所を言い表わすものとは考えずに、むしろそれを、全世界、ないし全宇宙の如何なる場所をも意味している、と考えることは出来ないであろうか。すなわち、世界、ないし、全宇宙の中のいづこのいかなる所にもせよ、その所が、エデンの園なのであり、その在処を全宇宙の中心として、その場の中央に、生命の樹は立っていた、とは考えられ得ないであろうか。

もしかりに、この世界、ないし全宇宙のいたる所が、その全体の中心であると言いうるとすれば、エデンの園は、この世界、ないし全宇宙の随所を中心として、このいたる所の中心の場のただなかに、生命の樹を立たしめていた、と言うことが出来るであろう。すなわち、生命の樹は、全宇宙の中心に立つ、かけ替えなき唯一無比の樹でありつつも、同時に、それが随所に在りうるものであるということによって、この宇宙に存してある万物は、それぞれに、そのあるがままに、その置かれた随時随所の場にあつて、それ自らの生命のもといなる生きの息吹ブネツキに根ざして、まさしく生命の樹として、エデンの園のさなかに立っている、と言いうるであろう。このさなかなる場とは、生きとし生け

る万物が、それぞれ個々に相い分けられてありながらも、その個自身の中に入って止まり蔵れるでもなく、外に出て陽となり、その固有を失うというのでもない⁽⁴⁾、いわば、内外を打成せるごとき⁽⁵⁾、独一の個にして全体なる、随時随所の中心の場であるであらう。かかる随所の場なる全宇宙の中心に、無心に立てる（柴立する）⁽⁶⁾もの、それが、生命の樹である。

さて、生きとし生けるものの一切の生命は、それが生命の樹として、すなわち、まさしく樹木として言い表わされてあることによって、それは、大地に深くその根を降ろしてあり、したがって、一切の生命は、かの、生命のもとなる生きの息吹（氣噴⁽⁷⁾、靈氣⁽⁸⁾）の吐き入れられた「地の土くれ」⁽⁹⁾の、さらには、大地の根源の、「生命の流れ」⁽¹⁰⁾に深く根ざしてあるであらう。生命の流れとは、この場合、大地に吐き入れられた息吹の流れ、ないし、靈氣の流れに他ならない。この流れによって貫通された大地は、それ自体、靈的なものなのであり、それは、靈的な土、すなわち「処靈」⁽¹¹⁾として云い表わされうるであらう。処靈（地靈）⁽¹²⁾なる大地は、それ自身、生命の流れを呼吸する⁽¹³⁾ものであり、それは、その随所の中心の場（処）において、生命の樹を生かしめ育くむ「産む靈」の「靈の座」⁽¹⁴⁾なる「産む土」（「うぶすな」⁽¹⁵⁾なる「むすび」⁽¹⁶⁾とも称びうるであらう。

かかる大地に、生命の樹はその根を張り、その根の到り帰る、見えざる根源⁽¹⁷⁾としての「生命の流れ」から、それ自身の生命のもといなる靈氣を、生命の水（靈水）⁽¹⁸⁾として、自ら知らずして汲み用い、その肢体にくまなく貫流せしめているのである。また、生命の樹は、同時に、その肢体を天空に刻み、天空の一角を占め、その肢体によって天空の一角を蔽うことにより、陽光を身に滲ましめつつ、生命の火を点してあり、かくして、天空と大地とを繋ぎつつ⁽¹⁹⁾、両者を貫通して働くいのちの息吹なる宇宙的靈氣（氣息）⁽²⁰⁾を、いわば「天籟」⁽²¹⁾として、自らの牀内の隅々にまで、出入せしめているのである。しかも、この生命の樹を貫通してある陽光は、かの根基の源泉なるいのちの息吹とともに榮せられる「光あれ」の言によって成った、ないし現に成りつつある陽光に他ならず、この陽光と、そして、いの

ちの息吹そのものの發露せる靈風ブネツフとによって貫通されてあるところに、まさしく、生命の樹の風光が存する、とも云いうるであらう。

なお、この場合、陽光は、生命の樹をのみならず、生命の樹の立地せるその場所そのものを、その根底にいたるまで照破しているのでなければならぬ。すなわち、陽光は、まさしくかの「光あれ」の言によって知られるごとく、吐く息、つまり陽ヨウの氣にのせて語り出される言と一つなる光であり、したがって、「光あれ」の言は、息吹の發出する「口」を通して「土」へと「吐」かれ、大地は、その故に、息吹によっても貫通され、また光によっても照破されてあるであらう。吐く息（陽の氣）と一つなる陽光によって貫かれてある大地こそ、真に「陽なる土」としてあるが故に、それは、まさしく、「場」マなる文字によって、表現されてあるのである。そして、この「場」なる大地が、また、吐く息たる靈氣そのものによっても貫通されてあるという事態を、かの「処靈」トウレイなる文字が、既に明確に言い表わしていたのである。

かくして、万物を生命あらしめる大地たる「場所」は、つねに、かように、光と風とに貫かれてあるのであり、それ故に、「場所」とは、それ自体の中に、いのちの息吹をはらむ、というようなものであらぬばならぬ、と考えられる。たとえば、『創世記』第三章に記される、かのエデンの園に響く神の足音、すなわち、「日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音」ヨミは、息吹そのものなる神、靈そのものなる神が、風として現前して、エデンの園なる大地を吹き渡り、ないし、大地を吹き貫くことによって、その足音を響かせていたのである。したがって、エデンの園としての大地は、まさしく真に、神の息吹に吹き貫かれる「処靈」トウレイ、神の息吹をはらむ「処靈」としての「場」そのものである、とも言いうるであらう。我々が日常使い慣れている、かの「風土」なる語もその根源の意においては、本来、このような視点を表わす語であったであらうか。

さて、生きとし生けるものの生命とは、生物イモロ、つまり、息物イモロのなす呼吸、すなわち、息するもの、ないし、息吹す

るものの生き（息）のいのち、換言すれば、息の「息の内」⁽⁴⁾「氣の内」⁽⁵⁾のことを意味しているであろう。したがって、かの「生命の樹」の根の根源たる「生命の流れ」は、息の内の流れ、すなわち、そのいのちなる息吹の、息の内にあって、たえず往還し去来してやまぬ相い交代する氣息の出入の流れ、いわば、出息と入息、呼吸と吸気、吐息と納息⁽⁶⁾ないし、阿と呼⁽⁷⁾、吐と含⁽⁸⁾——さらには、露と没⁽⁹⁾、通と塞⁽¹⁰⁾、展開（explicatio）と包含（complicatio）⁽¹¹⁾「息を吹き込む」（inspiratio）と「息を取り去る」（expiratio）、ないし、「息を引き取る」等々——のたえず相い交替して果てることなき、波動的な氣息の流れを表わしている、と考えられる。

すなわち、この流れは、宇宙の中心に聳立してある、かの生命の樹の体腔を貫いて流れる息の内の流れ、ないし、氣息の流れであるであろう。換言すれば、それは、生命の樹の根の沈もり降りゆく大地の底いなる底無き根基の源泉と、一方、この樹の枝の張り拡げられる窮み無き天空の果たてとを繋いで聳え立つ、生命の樹の体腔を、上下に貫通する氣息の流れを意味しているであろう。それはまた同時に、この生命の樹の体腔の内と外とを貫通し、両者を打って一丸とする、いわば、かの内外打成一片の氣息の流れであるであろう。すなわち、それは、天と地の果たしなき上下を繋ぐのみならず、また、生命の樹の体腔の内なる至小の極みと、限りなき至大の外界とを繋いで両者を貫通し、両者相互の間を自在に交通してやまぬ、宇宙的氣息の流れそのものを示しているのである。この氣息の流れは、それ自らを、それ自らの根基の源泉へと没し収め充塞せしめてゆく一方、またそれは、この源泉から発露し胚胎して、その根基の流れのおよぼす働きを、一切を通して遍く拡げ、果しなき虚空へと展開してゆくのである。

この宇宙的氣息——それは、氣、息吹、靈、靈氣、靈風、靈水、風等の意を併せ持つ——によって貫通され、生きとし生けるものが、各々それ自身、この宇宙的氣息そのものとなり、ないし、この氣息をして、自らの体腔と豪竅⁽¹²⁾（百骸九竅）⁽¹³⁾を、上下、内外に、無礙自在に出入せしめることによって、生きとし生けるものは全て、生命の樹として、それぞれに、宇宙全体——天上天下、内外十方に張り渡された——と一つなる、随所の中心としての場に立つ

であろう。しかも、生命の樹が、いま、それぞれにその随所の中心において樹立してあるというかぎり、それらは、この宇宙的氣息そのものによって自在に貫通されてありつつも、なお、この氣息を、各々がそれ自身に固有の在り方において孕み体することにより、生命の樹は、各々、この宇宙的氣息を、それ自身に固有なる息吹として、すなわち、それ自らの息の根から、しかも、自らの息の根の底なき底から、ないし、その底なき根底に根ざして、息吹するであらう。かくして、生命の樹は、宇宙的氣息の全体と、その流れを一にしつつも、なお、各々、それ自身において独立せる、互いに他とは異なる、他には非ざる、すなわち、それ自らに他ならざる、随所随時の独一なる中心として、無比にして独自なる、その地歩を占めるであらう。

さて、かかる独一なる中心としての生命の樹は、それぞれに、その随時随所のいたるところの場において、宇宙的氣息によって貫かれ、たいし、それを孕み育くんでいたのであったが、いま、これらの独一なる中心の一切を内に包みつつ、それらを、自らの中なる随所に随時に在らしめる全体としての宇宙も、同じく、この宇宙的氣息によって貫かれつつ、この氣息の流れに根ざして、生命の息吹をはらみ育くむ母体としてあるであらう。すなわち、宇宙は、他の一切の生命の樹と同じく、それ自らが、また、息吹する独一の主体、独一の中心としてありながらも、まさしく、それは、天地の間の一切を包含し、天地それ自体を自らの体腔とする宇宙大の生命の樹、すなわち、ただ一つ天地の間に聳え立つ、一の太いなる至大の一たる生命の樹である、とも言いうるであらう。

ちなみに、宇宙を意味する乾坤なる語は、本来、「闔闢」なる語と同一の意義を有しており、したがって、宇宙、ないし、乾と坤とは、それぞれに、闔と闢たる、宇宙そのものなる氣息の門の、閉ち開く働きを示しているのである。またそれは、乾坤それ自身なる、宇宙大の橐籥（たうやく）（ふいご）（鞴・吹子）の収縮と拡張の働きをも意味しており、したがって、宇宙は、それ自らの闔ち闢きにもなって波動する、氣息の流れそれ自体を示すであらう。万物は、この闔闢の働きと一つなる宇宙的氣息の流れの中に浸ることによって、この闔ち闢きにもなう、根源の原波動の去来の流れ

と一つにあり、その波動に、それ自らの氣息の波動を合わせて息吹し、無心に、その流れにその身を打ち委せているのである。すなわち、そこにおいては、何らの分別も生起することなく、したがって、生命の樹と知恵の樹の相反、ないし、兩者の分離、分裂、葛藤は全く存せず、兩者は、相共に、一つなる根源の根、「あらゆる根の中の根」⁸⁸⁾にもとづいてあり、それ故、今や生命の樹は、知恵の樹をも包含する、真に独一なる生命の樹としてあるであろう。

ともあれ、闕闕として宇宙それ自らなる、かかる宇宙大の息吹する独一なる中心は、その大いなる至大の一が、そのまま同時に全体であるごとき、全体的一、ないし、一なる全体なのである。すなわち、一なる全体としての宇宙が、独一にして唯一なる生命の樹として、まさしく、宇宙そのものとして、真に、宇宙の中心に聳立してあるのである⁸⁹⁾。そこにおいては、中心は、そのままに全体である。しかも、それは、それにおいてある、いわばそれ自らの部分をなす、随時随所の独一なる個々の中心を、おしなべて内に包みつつも、なお、その中の至小の一点すらをも、全体の中心となすことによって、それ自らの全体の一切を挙げて、この至小の一点と一つにあり、この一点と一つに、挙体、その働きをともし、相いともに、生命の流れの鼓動を生きてやまぬ、全体の働きである。

また、この全体においてある至小の一たる独一の個も、それが、全体の随時随所の中心として生きていることによつて、それは、それ自らの存在の一切を挙げて、自らの中に全体を生き、至大の一そのものを、自らの中に生きているであろう。しかもそれは、至大の一の中に生きつつも、飽く迄、自らの至小の一としての独自の在り様を生きる、独一の個たるにとどまるであろう。すなわち、個は、内に全体を生きつつも、個としてあり、また、全体は、内に個を生きつつも、全体としてあるというごとき、兩者の、いわば、相依相関、たいし、相即相入の關係を、ここに見得るでもあろうか⁹⁰⁾。

いま、かかる個も全体も、生命の樹として、あいともに、生命の流れに浸りつつ、その流れに貫通されてあるが故に、生命の樹のそれぞれは、この流れの発起し来る底なき元底より、たえず新たなる生命を得て、それぞれの置かれ

てある随時随所の場にあつて、個は個として、その面目を一新し、また全体は、全体として、その風貌も新たに、互いの欠くべからざる相関の中において、一瞬一瞬に、しかも一挙にして、かの元底より生起し来るのである⁽⁴⁾。かくして、個も全体も、それぞれが、この流れの中に生きつつ「万物同氣」⁽⁵⁾、この流れを自らの生命として生き、この流れを自らの脉内に孕み、育くみ、たえず、新たな生命の流れに棹さすことによつて、それぞれは、その固有にして独自なる、生命の樹としての在り様を、かの生命の流れの根源の底なき元底から生きるであらう。

さて、「生命の流れ」なる語は、聖テレサ (Santa Teresa de Avila) によれば、本来、「神なる生命の流れ」として言い表わされていたものであつて、この流れのさなかに、この流れを「生命の源泉」(fons vitae) として、生命の樹は植えられていたのである。テレサによれば、この生命の源泉は、生命の樹として現前せる靈の中心、ないし根源にあつて、太陽のごとくに燃えさかつてあり、靈は、この内なる太陽によつて、生命の燈を点じられ、水晶のごとくにも、太陽の光を反射する、というのであつた。すなわち、生命の樹なる靈の根源には、生命の源泉なる太陽があり、その源泉それ自体から発する生命の流れと一つに、太陽の光の放射「神性の電光放射」⁽⁶⁾とも言うべきか) がおこなわれて、かくして、靈に、真の生命の元なる氣息(真元の氣⁽⁷⁾、元氣⁽⁸⁾、天地の一氣⁽⁹⁾) が流れ入り、生命の火花(靈の閃光⁽¹⁰⁾) が点じられる。この点じられた閃光は、灼熱のマグマとなつて、靈そのものを溶融し、衝き動かし、マグマなる靈は、いまや、光の源なる太陽の光を反映しつつ、その光と一つに、自らの生命の光を放射するのである。

かくして、生命の樹は、テレサの比喩を用いれば、あたかも、無数の水晶の集められた水晶宮におけるがごとく、個々の水晶のそれぞれが、内に、かの光の源を宿し、その光を受け、その光を映し照射して、互いにその光を交え、限りなく、また尽きることなく、いわば重々無尽にも、映発しあふ風光の中に、その身を委ねてあるのである。この風光とは、かの源泉のマグマなる生命の流れによつて溶融されつくした靈の中心を、根源(根元)の氣息(風)と光とが、自在に、完膚なきまでに貫き入り、観入して、これによつて、マグマなる靈それ自らが、生命の流れを孕

み、その底なき根源から随時随所に生まれ出で、かの氣息（風）そのものとなり、光そのものとなって、自らの働きを働くところに開ける風光である^㉒。この働きは、根源の氣息の迫り来るがままになされ、ないし、古人のいわゆる「片雲の風」^㉓のさそうがままになされる働きでありつつも、その氣息の及ぶ足踵^㉔は、大地の根を離れず、その呼吸は、天地の氣息の流れを繋いである、随時随所を中心としての、生命の樹なる我自身の、靈（氣）、たましひ、魂・魄^㉕の働きである。

ところで、かの「神なる生命の流れ」なる語は、生命の樹の根ざす、息吹の流れたる、見えざる源泉の神を指していたのであって、なおそれは、その流れの発する源たる、かの底い無き元底を指し示していたであらう。『ともあれ、それは、万物の生命の根源たる息の内の根、生の靈の胎^㉖、すなわち、生きの命の根（命根^{みよこん}）、ないし、万物の「息の根」たる神を、表わしていたであらう。しかもいま、この万物の息の根たる神の、すなわち、あらゆる根の中の根たる神の、その息吹の発せられる源、ないし、神自身の息吹の息の根そのものが、なお、問われねばならないであらう。すなわち、万物の生命の基いなる神自身の、「息の内の根」が、問われねばならない。本来、息吹それ自体は、我の所有物ではあり得ず、またそれは、何もののも所有ともなり得ない^㉗が故に、したがってそれは、なお神の所有ではなく、むしろ、この息吹の、息の根によってこそ、神も、真に神として生げるものたりうるのであって、かくして、神の、その息の根は、神すらをも超えてあるであらう。息吹は、あく迄、息吹それ自身にして、それ自身の息の根から発し、それ自身の息の根へと帰りゆくのであり、かかる息吹の、息の根それ自体を息吹することは、神にとってすらも不可能事なのである。神すらもそれを息吹することをなし得ない、このような息の根こそが、真に、神の息の根であり、それは、神をも超える神として、生命（生の靈^{いのち}）の流れの根源の、底い無き元底であるであらう。それを、古人に倣って、「元底」、「無底」、ないし「無極」、「玄」、「玄同」、「太一」、「太易」、「太虚」、「空」、「如」、「絶対無」、「神性」、「ブラフマン」、「エン・ソーフ」等々とも称びうるであらう。あるいはそれを、「風格としての

神」とも名付けうるであらうか。このような諸概念についての考究は、しかしいま当面の課題ではない。ともあれ、生命の樹の根ざす、生命の流れの源泉は、かかる「息の根」にまでも及んでおらなければならない。

万物は、かかる原基の「息の根」から吹き入れられた氣息を、自らの氣息として、自らの息の内なる息の根へと吸い入れつつも、同時にその氣息を、その氣息の発する原基の「息の根」から、その根の根こそぎに、吸い納めんとするであらう。他方また、万物は、自らの息の内なる生命の息吹を、それ自らの息の根から吐出しつつも、それを、その本来の基いたる、かの「息の根」へと、自らの息の根こそぎに、吐出しゆくことによって、その吐出された息吹を、原基の「息の根」たる、かの「息を引き取るもの」〔撰収者〕のもとへと、その撰収の働きに委ねまかせらるであらう。しかも息吹は、本来、その息吹の発する源たる「息の根」をば、決して息吹し得ないのであって、出息は、出息の働きのみに徹しつつも、入息をその根とし、また入息は、入息の働きのみに徹しつつも、出息をその根として、相い互いに、相互の息吹の働きの根となりあっているのである。すなわち、出息も入息も、ともに、それぞれそれ自身の息の根それ自体を息吹することはなし得ないのであって、したがって、出・入息それぞれのその息の根は、むしろ、根なきものたるにとどまるであらう。息吹は、その出息においても、また入息においても、その根こそぎの働きのみにかわらず、なお、この根なきものたる「息の根」そのものを、息吹することはなし得ないのである。息吹は、息吹のもとを息吹し得ないが故にこそ、息吹なのである、とも言われ得よう。それ故、息吹は、この出息と入息とを繋ぐものたる、それ自体息吹され得ざる、原基の「息の根」の、無限の働きの打ち委さざるを得ない極みに立つてであらう。「断命根」、「大死一番」、ないし、「十字架死」、「離脱」等々と称ばれる、自己放下の行の欠くべからざる所以である。「密々たる工夫、風を漏らさざ」とあるところに、かの「息の根」は、その自づからなる、無根にして無窮の働きを、「鬱浮」として働き出づるであらう。

注

- (1) 拙論『風格としての神——ドイツ神秘思想の体得のために——』の第二章『風についての省察』（上田閑照編『ドイツ神秘主義研究』創文社、昭和五十七年刊。同増訂版昭和六一年刊、所収）、および、拙話『いのちの息吹』（NHKラジオ第二放送「宗教の時間」、昭和六一年二月二一日放送）を参照されたい。
- (2) 『莊子』達生篇参照。「入りて蔵る^{かく}る^{なく}、出でて陽^{あうむ}にする無く、其の中央に柴立^{さいりつ}す。」（福永光司『莊子』外篇・下、中国古典選15、朝日新聞社、昭和五十三年刊、三一頁）。
- (3) 『無門関』第一則参照。
- (4) 註(2)参照。
- (5) 幸田露伴『音幻論』参照（洗心書林、昭和二十二年刊、二三頁）。
- (6) 『創世記』二・七参照。「ヤハウェ神は地の土くれから人を造り、彼の鼻に生命の息を吹きこまれた。」（関根正雄訳、岩波文庫、一二頁）。
- (7) Vgl. Santa Teresa de Avila: *Castillo interior o Tratados de las Moradas*. 「かくも燦爛たる、かくも麗しきこの城、この東方の真珠、神なる生命の水流^{みづなが}の中間^{まへ}に植えられたこの生命の木（詩篇一ノ三）」。一口に言えばこの靈魂……は、太陽の光線を反射する水晶の如くに……ある。」「生命の源泉……この源泉、もしくは靈魂の中心に在る燦爛たるこの太陽は、いささかもその光輝と美とを失うものではない。……靈魂は神に対して……太陽に向けられた水晶の如くである。」（聖テレサ『靈魂の城』田村武子訳、世界文庫、弘文堂、昭和二十三年刊、一八、一九頁）。また、『ヨハネ黙示録』二二・一一、および、『エゼキエル書』四七・一二、および『パウロの黙示録』四五（新約聖書外典、講談社、一九七四年刊）参照。
- (8) 白川 靜『字訓』参照（平凡社、一九八七年刊、五二二、五三二、四九四頁）。「土は社にして地靈を祀るところ、……「うち」が「處^との靈^ち」を意味するのとまさに対応する。」（同書、五一二頁）。
- (9) Vgl. Gershom Scholem: *Zur Kabbala und ihrer Symbolik*, Zürich, 1960, S.215: "Erdgeist." (ケルシ ヨ ム・シ ヨーレンヤ『カバラとその象徴的表現』、小岸昭、岡部仁訳、法政大学出版局、一九八五年刊、二二五頁）。
- (10) 『莊子』齊物論篇参照。「夫れ大塊^その噫^{だいち}氣^きは其の名を風と為^いう。」（福永光司『莊子』内篇、中国古典選12、朝日新聞社、昭和五十三年、六〇頁）。また、『楚辭』風賦参照。「夫れ風は地に生じ、……」（小南一郎『楚辭』、中国詩文選6、筑摩書房、昭和四十八年刊、二七一頁）。

(11) 白川 靜『字訓』参照(前掲書、三六六頁)。

(12) 白川 靜『字訓』参照(前掲書、同頁)。「産む土」を「うぶすな」、「土」を「すな」と称ぶ点については別に論じる。

(13) 豊田国夫『日本人の言霊思想』参照(講談社学術文庫、昭和五七年刊、二四一・二六、四八頁)。および、折口信夫『神道概論』、中央公論社、昭和六二年刊、二八三―二九二頁)。「むすひ」のむす(産)は、息子のむす、ひは産む息なるたましひであろう。

(14) 『莊子』即陽篇参照。「万物は生ずること有りて其の根を見る莫し。」(福永光司『莊子』雜篇・上、中国古典選16、朝日新聞社、昭和五三年刊、二〇八頁)。

(15) ロジャー・クック『生命の樹——中心のシンボリズム』参照。「生命の樹や宇宙樹は、天、地、地下という三つの領域に侵入する。……枝は天空に広がり、根は底知れぬ深みへとおりてゆく。……それは天と地とを結びつけて、上方および下方に根をはる」のである。」(植島啓司訳、イメージの博物誌15、平凡社、昭和五七年刊、一六頁)。

(16) 『莊子』齊物論篇参照(福永光司『莊子』内篇、中国古典選12、朝日新聞社、昭和五三年刊、六〇頁)。

(17) 白川 靜『字統』参照(平凡社、一九八四年刊、八四九、八五〇頁)。「陰陽はもとと會易としした。易……を日と一と勿の會意とするが……その靈のはたらきを、また陽という。……太陽は陽氣の根原で……陽光の及ぶところを陽といい、……陰陽が何れも神梯の形である處に従うのは、聖所における魂振り儀礼のしかたを示す字であるからであろう。」註(8)をも参照。

(18) 白川 靜『字統』参照(前掲書、四五九頁)。「易は台上に玉をおき、その玉光が下方に放射している形で、玉による魂振りの儀礼を意味する。そのような儀礼の行われるところを場という。……場とはもともと神靈を迎えるところで、いわゆる「祭の場」であった。」

(19) 『創世記』三・八『聖書』、日本聖書協会、一九六三年刊、三頁)。

(20) 確井益雄『靈魂の博物誌』参照(河出書房新社、一九八二年刊、四二頁)。

(21) 幸田露伴『音幻論』参照(前掲書、二三頁)。

(22) 『莊子』刻意篇参照。「吹呬呼吸、吐故納新、能經鳥申、寿を為すのみ」(福永光司『莊子』外篇・中、中国古典選14、朝日新聞社、昭和五三年刊、一二三頁)。

(23) 弘法大師『声字実相義』、および『呬字義』参照(弘法大師著作全集、山喜房佛書林、昭和五八年刊、第一卷所収)。

(24) 三浦梅園『多賀墨郷君にこたふる書』参照。「もしよく天地に達し條理に吐、含ある事をしらば、地なんぞ天より小ならん。

天又何ぞ地より大ならん。「己に一物あれば、其物に没する氣を有し、露する體を有するなり。」「唯衰々として通するを宙、塊々として塞かるを宇と御覽可被成候」(三枝博音編『三浦梅園集』、岩波文庫、一九八〇年刊、二二、二三、二五頁)。

(25) 同右

(26) 同右

(27) Nicolaus Cusanus : De docta ignorantia, II, 3. PhB. 264b. S. 24 : "Deus ergo est omnia complicans in hoc, quod omnia in eo. Est omnia explicans in hoc, quod ipse in omnibus." 「神は、万物が神のうちに存在するとうことにおいて、万物を包含するものであり、また、神自身が万物のうちに存在するとうことにおいて、万物を展開するものである。」(ニコラウス・クザヌス『知ある無知』、岩崎允胤、大出哲訳、創文社、昭和四一年刊、九四頁)。

(28) 『無門関』第一則、および『莊子』齊物論篇参照。

(29) 芭蕉『笈の小文』参照。「百骸九竅の中に物有り、かりに名付けて風羅坊といふ。」

(30) 張横渠『正蒙』参照。「人の息有るは、蓋し剛柔相摩し、乾坤闔ち闢くの象也。」(西晋一郎、小糸夏次郎訳註『太極図説』、通書、西銘、正蒙』、岩波文庫、昭和三年刊、一三〇頁)。

(31) 『老子』上篇、第五章参照。「天地の間は、其れ猶お囊籥のごとき乎。虚にして屈きず、動きて愈いよ出ず。」(福永光司『老子』上、中国古典選10、朝日新聞社、昭和五三年刊、六八頁)。

(32) 『抱朴子』卷一、暢玄参照。「玄は唯一実在を内に孕み、それが陰陽の兩範疇として展開する。その呼吸は生命の源、鍛冶屋の鑪と同様、億万の物を鑄出す。」(本田済訳、中国の古典シリーズ4、平凡社、一九八四年刊、四、五頁)。同、岩波文庫本、二五頁。

(33) Vgl. Gershom Scholem : ibid. S. 138. „Wurzel aller Wurzeln“.

(34) 『ソロモンの知恵』七・二四―二六参照。「知恵は神の力の息であり、金能者の榮光の純なる流出、それゆえ汚れたるものはその中に入り込めぬ。それは永遠の光の反射、神の働きのしみなき鏡、彼の善性の像である。」(『聖書外典偽典』2、旧約外典II、日本聖書学研究所編、関根正雄訳、聖文舎、一九八三年刊、三五頁)。

(35) エリアード『大地・農耕・女性』参照。「樹木は宇宙である。」「樹木が宇宙木となるのは、それはそれがあらわすところのものが宇宙があらわすところのものを完全に再生しているゆえである。」(堀一郎訳、未来社、一九八四年刊、一二九、一三〇頁)。

- (36) 賢首大師法藏『華嚴五教章』、および『莊子』齊物論篇参照。「天地も我れと並に生えて、万物も我れと一つたり。」(福永光司『莊子』内篇、九九、一〇〇頁)。
- (37) 宗密『註華嚴法界觀門』、および『莊子』齊物論篇参照。「俄かにして有無あり。」(福永光司『莊子』内篇、九七頁)。
- (38) Leibniz: *Monadologie*. § 61, PhB. Bd. 253. S. 54: *συντηρητικα πάντα*.
- (39) Leibniz: *ibid.* § 47, PhB. Bd. 253. S. 46: *“des Fulgurations continuelles de la Divinité”*. なお、ジエフ・ニードム『中国の科学と文明』第三卷(思索社、一九八三年刊、五四七―五五八頁参照)は、ライブニッツと朱子の関係に詳しい。ライブニッツのテレサへの傾倒は周知であろう。
- (40) 『河南程氏遺書』卷第一五参照。「真元之氣氣之所由生」「真元自能生氣」(『二程集』一、中華書局、一九八四年刊、一六五、一六六頁)。
- (41) 『太上老君中經』卷上・1a~3a 参照。「第一神仙。上上太一者道之父也。及在九天之上。太清之中。八冥之外。細微之内。吾不知其名也。元氣是耳。」
- (42) 『莊子』大宗師篇参照。「彼れ方に且に造物者と人と為りて、天地の一氣に遊はんとす。」(福永光司『莊子』内篇、二九三頁)。
- (43) Vgl. Meister Eckhart: *Deutsche Predigten und Traktate*, hrsg. u. übersetzt von J. Quint, München, S. 316: *“das Fünkeln in der Seele”*. (上田閑照『ハイスター・エックハルト』人類の知的遺産21、講談社、昭和五八年刊、二三〇頁)。
- (44) 拙稿『太陽に誰が火を点けたか』参照(上田閑照、前掲書所収、『月報』三、四頁)。
- (45) 拙稿『創造主の絵の具『光と風』』参照(『読売新聞』六一年一〇月一四日夕刊号、宗教欄所載)、および、九鬼周造『いきの構造』参照。「体中の『風』が呼吸を媒介として、碧空に吹く『風』に身を任すときに、風流の士となるのである。」「風流とはまず最初に離俗した自在人としての生活態度であって『風の流れ』の高邁不羈を性格としている。」(岩波文庫、一九七九年刊、一二六、一二七頁)。
- (46) 芭蕉『奥の細道』参照。
- (47) 『莊子』大宗師篇参照。「古の真人は、……其の息するや深々たり。真人の息は踵を以てし、衆人の息は喉を以てす。」(福永光司『莊子』内篇、二五四、二五五頁)。

(48) 氣、靈、たま・し・ひ、魂・魄、等については、稿を改めて論じたいと思う。

(49) 白川 靜『字訓』参照（前掲書、一二五頁）。

(50) 石田梅岩『都鄙問答』参照。「呼吸は天地の陰陽にして、汝が息に非ず。因て汝も天地の陰陽と一致にならざれば、忽に死するなり。陰陽の外に汝が命なきこと明白なり。吸息は陰なり吐息は陽なり。繼之者は善なり。」（足立栗園校訂、岩波文庫、昭和四八年刊、七三頁）。また、柳宗悦『宗教とその真理』参照。「彼等の脈膊は彼等の心臓が打つのではない。何ものか匿れた力が呼吸するのである。」「わが呼吸はわが作為ではない。」（春秋社、昭和三五年刊、九六、九七頁）。および前掲拙論「風格としての神」参照（上田閑照編『ドイツ神秘主義研究』所収、三二〇、三二三頁）。

(51) 『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』四・三・八一、三、四参照。「風こそ実に「摂収する者」である。……氣息こそ実に「摂収する者」である。……神々の間では風、諸機能のうちでは氣息——この二つが実に「摂収する者」である。」（服部正明『古代インドの神秘思想』講談社、昭和五四年刊、九七頁）。また『ウパニシャット全書』第三巻をも参照（世界文庫刊行会編、大正一一年刊、九二、九三頁）。

(52) 『莊子』則陽篇参照。「万物は生ずること有りて其の根を見る莫し。出ずること有りて其の門を見る莫し。」（福永光司『莊子』雑篇上、中国古典選16、二〇八頁）。

(53) 『プリハッド・アラーニアカ・ウパニシャッド』三・七・（一六）参照。「氣息の中に住んで、氣息よりも内奥のもの、氣息はこれを知らず、却つてその形骸となっているもの、そして氣息を内より制御するもの、かくの如きものが貴師の自我であり、内制者であり、不死者であります。」（佐保田鶴治『ウパニシャッド』平河出版社、昭和五四年刊、一一〇頁）。また『ウパニシャット全書』第一巻をも参照（前掲、七〇頁）。

(54) 註60参照。

十字架を生命の樹としてとらえる点については、別の機会に論じる。

(55) 上田閑照『マイスター・エックハルト』参照（前掲書、二六九—二八三頁）。および、拙著『無底と悪序説』参照（創文社、昭和四七年刊、一三五頁）。

(56) 『禅林句集』参照（柴山全慶輯、其中堂、昭和五三年刊、一九四頁）。

(57) 三浦梅園『多賀墨郷君にこたふる書』参照（前掲書、二二頁）。